



TITLE:

唐代内附民族対象規定の再検討 : 天聖令・開元二十五年令より

AUTHOR(S):

石見, 清裕

CITATION:

石見, 清裕. 唐代内附民族対象規定の再検討 : 天聖令・開元二十五年令より. 東洋史研究 2009, 68(1): 1-33

ISSUE DATE:

2009-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/157327>

RIGHT:

東洋史研究

第六十八卷 第一號 平成二十一年六月發行

唐代内附民族對象規定の再検討

——天聖令・開元二十五年令より——

石 見 清 裕

はじめに

一 唐・賦役令の内附民族規定三條

二 天聖令「没落外蕃」條

三 「夷獠」と「夷狄」

(1) 唐の「夷獠」招慰

(2) 日本の「夷狄」解釋について

四 天聖令における輸羊・銀錢規定その他の條文の扱い

(1) 輸羊・銀錢規定條文の削除

(2) 「蕃域」「絶域」規定について

むすび

はじめに

中國史上に現れた幾代もの王朝には、程度の差こそあれ、多くの王朝が「多民族複合國家」としての側面を有しているといつてよいであろう。「多民族複合國家」という概念規定の指針はいくつかが想定されようが、ここでは、その王朝が支配領域内の居住民を把握するのに、居住民の生活文化の相違を考慮して複数の把握形態によって領域内を統治する國家を指す。このような統治方法の相違性には、その國家の性格が色濃く反映されるのであり、またそこには、そうした統治對象が現在の中華人民共和國の公式見解として示される五五種の少數民族とどのように關係するのか等々、重要な問題が潜んでいるはずである。

こうした關心から、先に私は、唐代行政法の課税規定である「賦役令」のうち、漢族（ここでは租・調・役負擔のかかる百姓の形態を指す）以外を對象としたと思われる條文を取り上げ、それらがどのような形態の種族を對象としたものなのかを考察した（以下、本稿では「舊稿」と稱す⁽¹⁾）。唐代を取り上げたのは、出土遺物などから外來文化の影響が強いとされる唐は、多民族統治王朝の一つのモデルになり得ると考えたからであり、また行政法を分析したのは、唐代には民衆の姿を浮かび上がらせる史料に乏しく、政府側の統治規定が一つの有効な分析材料になると考えたからである。

ところで、筆者が舊稿を草したころ、散逸した唐令を分析するには、學界では『唐令拾遺』および『拾遺』刊行後の唐令補足研究に依據するのが一般的であり、『唐令拾遺補』はまだ刊行されていなかった⁽²⁾。したがって、舊稿で取り上げた賦役令條文も『唐令拾遺』記載の條文に基づいたものであった。ところが、一九九八年に上海師範大學教授、戴建國氏によつて、浙江省寧波の天一閣に所藏される明抄本『官品令』が実は北宋・仁宗期の『天聖令』の一部であることが公表され、二〇〇六年には中國社會科學院歷史研究所の研究員の努力によつて、同抄本の影印版と校録本・清本・唐令復原研究⁽³⁾が刊行された⁽⁴⁾。これによつてわれわれは、以前には望むべくもなかった唐令原文の一部を見ることが可能となったのである。

る。

天一閣舊藏『天聖令』には、田令・賦(役)令・倉庫令・厩牧令・關市令・捕亡令・醫疾令・假寧令・獄官令・營繕令・喪葬令(附、喪服年月)・雜令が收録される。各篇目内は、「諸」字で書き始められる條文が列記され、その末尾に「右並因舊文以新制參定」と記され、續いてさらに「諸」字で始まる條文が列記され、最末尾に「右令不行」と記される。すなわち、前半部分は唐令に基づいて天聖年間纂定された宋令の條文、後半部分は天聖令纂定にあたって使用されなかった唐令の條文を抜き書きしたものと解釋される。

一方、唐代における令編纂は、高祖・武徳七年(六二四)に最初の纂定が行われ、これが太宗・貞觀令、高宗・永徽令へと受け繼がれた。日本の大寶令は永徽令に依據し、それが養老令に受け繼がれたとされる。その後、唐令は玄宗・開元七年(七一九)に改訂され、さらに開元二十五年(七三七)に再度改訂された。開元二十五年令發布の後、唐および五代期には令の全面的改訂は行われなかったと考えられているので、天聖令の前半部分の末尾「舊文」、および後半部分の末尾「右令」とは、主に唐・開元二十五年令の條文を指すと解釋され、そしてこれは『唐令拾遺』開元二十五年令條文と照合しても、ほぼ肯首されてよいと思われる。⁽⁵⁾このことは、別の見方をすれば、天聖令の出現によって、日本の養老令にある條文で天聖令にもほぼ同じ條文が確認される規定は、唐初武徳七年令から開元二十五年令まで一貫して繼承された條文であると、われわれは判斷できるようになった譯である。なお、天聖令の各篇目の後半部分「右令不行」とされる條文群を指して、最近の學界では「不行唐令」という呼稱が一般的になりつつあり、本稿でもこの呼稱を使用する。

以上の経緯により、とりわけ二〇〇六年の天一閣抄本の公開によって、唐令研究は新段階に入った。これまで、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』等による復元條文案に依據せざるを得なかった狀況が、一部とはいえ唐令・宋令の原文を實見できるようになり、中國法制史研究や日唐律令制の比較研究のみならず、倉庫令や厩牧令による財貨の保管や家畜の管理、醫疾令による醫療制度のあり方、假寧令による官僚制の運営側面、喪葬令による喪葬儀禮研究等々、あらゆる分野において

一級史料が提示され、研究の飛躍的な進歩が期待できるようになったのである。⁽⁶⁾

そしてこのことは、とりもなおさず舊稿拙論で取り上げた條文も、天聖・賦役令によってあらためて分析しなおす必要性が生じたことを意味する。そこで本稿では、天聖令條文を参照して唐令の内附民族對象規定を再検討し、それによってもう一度唐代の非漢族統治のあり方に迫ってみたい。

一 唐・賦役令の内附民族規定三條

まず、行論の都合上、舊稿において筆者が分析對象として取り上げた唐・賦役令の條文を、あらためて提示しておきたい。それらは次の三條である。

〔史料A〕『唐令拾遺』賦役令第十六條（開元二十五年令）

諸沒落外蕃得還者、一年以上復三年、二年以上復四年、三年以上復五年。外蕃人投化者、復十年。

諸そ、外蕃に沒落して還るを得たる者は、一年以上ならば三年を復し、二年以上ならば四年を復し、三年以上ならば五年を復せ。外蕃人の化に投ずる者は、十年を復せ。

〔史料B〕『唐令拾遺』賦役令第十七條（開元七年令）

夷狄新招慰、附戶貫者、復三年。

夷狄の新たに招慰し、戶貫に附する者は、三年を復せ。

〔史料C〕『唐令拾遺』賦役令第六條（武德七年令、開元七年令）

諸（諸國）蕃胡内附者、亦定爲九等、四等已上爲上戶、七等已上爲次戶、八等已下爲下戶。上戶丁稅（銀）錢十文、次戶五文、下戶免之。附（貫）經二年（已上）者、上戶丁輸羊二口、次戶一口、下（戶）三戶共一口。（無羊之處、准白羊估、折納輕貨。若有征行、令自備鞍馬、過三十日已上者、免當年輸羊。）（カッコ内は『大唐六典』卷三、戶部による補足）

諸そ、(諸國の)蕃胡の内附する者は、亦た定めて九等と爲し、四等已上を上戸と爲し、七等已上を次戸と爲し、八等已下を下戸と爲せ。上戸は丁ごとに(銀)錢十文を税し、次戸は五文、下戸は之を免ぜよ。(貫に)附して二年(已上)を経たる者は、上戸は丁ごとに羊二口を輸し、次戸は一口、下(戸)は三戸共に一口とせよ。(羊無きの處は、白羊の估に准じて、輕貨を折納せよ。若し征行有らば、自ら鞍と馬とを備えしめ、三十日已上を過ぐる者は、當年の輸羊を免ぜよ。)

さて右の三條のうち、〔史料A〕は、『通典』卷六、食貨典六、賦税下と、『文獻通考』卷一三、職役考二、復除の記事に依據して復原された條文であるが、特に『通典』によって仁井田陞氏は開元二十五年令として復原された。この條文には、唐の領土外に出て行つて何らかの理由によって外地で没落し、その後、歸國した者を對象として、没落年數に基づく賦税免除期間が規定されており、それと並んで「外蕃人の投化者」を對象とする復十年が規定されている。

〔史料B〕は、日本の『令集解』「没落外蕃」條(唐令では〔史料A〕に對應)所引の「古記」に「開元令云」として引用された唐令であり、唐側の史料には一切見られない規定であつた。仁井田氏は「古記」の「開元令」を開元七年令と解したが、坂上康俊氏は『集解』所引「開元令」を全て分析した結果、それらを開元三年令と結論づけられ、『唐令拾遺補』もそれに従つて補訂した。⁽⁷⁾ここには、「夷狄の招慰者」に對する復三年が規定されている。

上記二史料が給復を規定しているのに對し、〔史料C〕は「諸國蕃胡の内附者」に對する具體的な納税品目と納税額が規定されている。それによれば、蕃胡の内附者は戸等が分けられ、それに準じて銀錢を基本とした税が課せられ、戸貫に附して二年を経過した者には羊を基本とする税が課せられる。さらに條件が附され、羊のない場所では白羊の價值に準じて布帛で折納すること、軍事遠征には鞍・馬自辨で從軍し、三十日以上從軍した者にはその年の輸羊を免除することとされる。この規定は、『舊唐書』卷四八、食貨志「武德七年、始定律令」記事、および『冊府元龜』卷四八七、邦計部、賦税「唐高祖武德……七年、始定均田賦税」記事に見える規定であり、さらに『六典』戸部にも記載されることから、仁井田氏は武德七年令と開元七年令にはこの條文が存在したと解釋された。『舊唐書』『冊府元龜』は「錢」に、『六典』は

「銀錢」に作るが、これを武德七年令では銅錢を徵收したが開元七年令で銀錢に切り替えられたと解するのは、そもそも開元通寶錢一〇文・五文を徵收する意味が理解できず、いくらなんでも無理である。ここは、『舊唐書』『冊府元龜』の他の字句の省略から考えても、『六典』が令原文に近いと見てよいであろう。

さて、右の三條をまず施行年代から考えてみると、『史料A』を仁井田氏は開元二十五年令として復原されているが、養老賦役令にも對應するほぼ同内容の「沒落外蕃」條が存在するのであるから、唐では武德七年令の時點より本條は存在したと考えられる。すると、『史料B』を開元七年令と解釋しても、あるいは坂上氏に従って開元三年令と見るならばなおさら、右三條はある時期には同時並存したことになる。とすれば、『史料A・B』では給復年數に差異があり、また『史料C』の銀錢と輸羊とを、附貫後二年經過で納税品目が銀錢から羊に切り替えられるのか、または銀錢に羊がプラスされるのか、いずれに解釋しようとも、そのような規定を設けておいて、一方では同時に復三年、復一〇年を規定しては全く意味をなさないのであるから、これらの三條の規定はそれぞれ對象者を異にすると見なければならぬであろう。すなわち、「外蕃人の投化者」、「夷狄の招慰者」および「諸國蕃胡の内附者」とは、それぞれ唐の法令上は異なった形態として把握されていた存在と考えるべきなのである。

そこで舊稿において筆者は、『史料A』の對象者は、個人または家族など現實的には少人數の外國人が、個人的理由によつて唐に歸化した形態が法制上は想定されており、『史料B』の對象者は、それまで唐の領域外にあった聚落などのあるまとまった組織・集團が、新たに唐の領域に組み込まれて唐の統治を受けるようになった形態が想定されていること、また『史料C』の對象者は、銀錢もしくは羊で納税するのが自然な形態でなければならず、そこでソグド人と遊牧系羈縻州民の兩種が一條中に想定されている條文と解釋したのである。

それでは、新出の天聖令には、これらの條文はどのように記されているであろうか。また、そこからはどのような問題が新たに發生してくるであろうか。

二 天聖令「沒落外蕃」條

天聖賦役令の條文群を見て、まず取り上げねばならないのは、不行唐令の第十二條として採録される次の條文である（便宜上、段落を附して引用する。カッコ内は訂正）。

(a) 諸沒落外蕃得還者、一年以上復三年、二年以上復四年、三年以上復五年。(b) 各給賜物十改（段）。(c) 外蕃之人投化者、復十年。(d) 其夷僚（僚）新招尉（慰）、及部曲奴婢於（放）附戶貫者、復三年。(e) 應給賜物、於初到州給三段、餘本貫給。

(a) 諸そ、外蕃に沒落して還るを得たる者は、一年以上ならば三年を復し、二年以上ならば四年を復し、三年以上ならば五年を復せ。(b) おのおの賜物十段を給せ。(c) 外蕃の人の化に投ずる者は、十年を復せ。(d) 其れ、夷僚の新たに招慰す、及び部曲・奴の放たれて戸貫に附する者は、三年を復せ。(e) 應に給すべきの賜物は、初めて到るの州に於て三段を給し、餘は本貫給せ。

まず段落(d)の「夷僚」について確認しておきたいが、唐代に「夷僚」という用語はなく、これは明らかに「夷僚」の誤寫である。さて、ここには、(a) 外蕃に沒落して唐に生還した者に對する三―五年の復除、(c) 外蕃人の投化者に對する十年の復除、(d) 夷僚の人の新たに招慰された者と、部曲・奴身分から解放されて戸貫に附された者とに對する、それぞれ三年の復除の、合計四種の對象者と三種の復除年数が規定されている。さらに、それらの對象者への、おそらくは當座の生活費のためと思われる賜物も同時に規定される。そのうち、(b)の「麻布」十段」の賜物對象に少なくとも(a)が含まれることは、まず異論はないであろう。ただし、(e)の賜物がどれを對象とするかについては、次の二通りの解釋が可能であるように思われる。すなわち、① (b)はあくまでも(a)のみを對象とし、したがって(e)は(c)、(d)を對象とした規定と解釋する方法、② (b)の賜物「十段」は、(a)だけでなく(c)、(d)も對象とし、十段のうちの三段を沒落歸還者や外蕃人投化者が最

初に到着した邊境の州が供給し、残る七段を落ち着き先の本貫にて供給するとした規定と解釋する方法、の二通りである。このうち、①の解釋はやや機械的な嫌いがあり、(e)には「(三段の) 餘は本貫給せ」とあるのだから合計額が想定されていなければならず、それは「十段」以外には考えられない。そして、この賜物の対象は「到る」者なのであるから、①の解釋ではなく、少なくとも(a)、(c)は(b)、(e)の対象者であるとしてよいであろう。(d)については、部曲・奴身分からの解放者に「初めて到るの州」を設定する解釋が困難であり、「夷獠」についても「到る」者なのかどうかを判定しなければ、斷定はできない(次節參照)。

さて、右の賦役令の條文は、古代日本の國家體制を論じる際にもしばしば議論の材料となる「没落外蕃」條であるが、天聖令の出現によつて、開元二十五年令(もしくはそれを繼承した唐後半期の令)の原文は右のとおりであったことが知られた。舊稿でとりあげた條文の一つ、前節の『史料B』、『令集解』所引「古記」の出典は、ここにあったのである。

従來、本條に含まれる規定は、『唐令拾遺』賦役令では、三つの條文に分けられていた。すなわち、前掲『史料A』(第十六條)、『史料B』(第十七條)、および第十八條に、

諸部曲奴婢放附戸貫者、復三年。

として復原される條文を合わせた、全三條である。

一方、對應する養老賦役令の第十五條「没落外蕃」條は、

凡没落外蕃得還者、一年以上復三年、二年以上復四年、三年以上復五年。外蕃之人投化者、復十年。其家人奴婢放附戸貫者、復三年。

のとおりであり、この復除対象者には、没落歸還者、外蕃人投化者とともに、家人・奴の解放者が含まれている。そこで、本來は唐令でもこれらは同一條文中に規定されていたのではないかと意見が一部ではささやかれ、筆者もそのように見る方がよいのではないかと思つていた。ただし、そうはいつても、仁井田氏が復原に依據した『通典』卷六、食貨典、賦

税下には、「開元二十五年定令」とした後に列記される諸規定中に

諸沒落外蕃得還者、一年以上復三年、二年以上復四年、三年以上復五年。外蕃之人投化者、復十年。諸部曲奴婢放附戶貫、復三年。

と記され、ここに明らかに「諸」字があるので、これらが同一條文とはどうしても斷定しにくかったのである。ところが天聖令の不行唐令第十二條の出現によって、『通典』の「諸」字に縛られることなく、唐令でも少なくとも、前掲(a)、(c)と、(d)の「部曲・奴……」部分は、同一條文に規定されていたと考えて差し支えなくなった。なお、ついでに言えば、『拾遺』賦役令第十六條～十八條は、別個の條文として復原したことは訂正されるべきであろうが、規定の配列は當を得ていたといわねばならない。また、第十八條の『拾遺』注記では「部曲奴婢」の「婢」は「被」の誤であるかもしれないとし、『唐令拾遺補』も、女性是不課であつて給復規定はありえないので「被」に訂正したが、これ⁽⁸⁾も妥當な解釋であり、日本令は「被」字を忠實に寫し取つたのである。

さて、天聖令所載「不行唐令〔没落外蕃〕條の(a)部分に關わる史料として、大谷一四一七文書に次のような斷片がある。斷片なので讀み下しは困難であるが、訓讀案を示せば左のとおりである。⁽⁹⁾

(前缺)

☐ 出請給復 ☐

牒准式者落蕃人張孝感

牒所由准式者牒至准狀

「二行空き」

開元廿九年十月廿三日

佐

(後缺)

(前缺)

……出だして給復を請う……

……牒……式に准ぜよ、と。落蕃人の張孝感は……

……所由に牒して式に准ぜよ、と。牒至らば狀に准ぜよ。……

(故に牒す。)

開元廿九年十月廿三日

佐

(後缺)

右は、外蕃に没落して歸還した張孝感が給復を申請した案件を縣官が處理した文書の斷片と判斷され、これによって少なくとも開元二九年(七四二)時點で「没落外蕃」條の(a)規定が實際に運用されていたことがわかる。また、(d)「部曲・奴……」部分に關わる史料として、トゥルファン出土の永徽二年(六五二)以後の「某郷戸口帳(草)」のうちの(三)文書(69TKM39.9/2(b), 9/3(b))は給復の事例を列記したものであるが、その第六行に、

口二放賤從良給復

(10)

と見える。これによって、(d)「部曲・奴……」部分も實際に運用されていたことがわかる。問題は、(d)の「其夷僚(獠)新招尉」部分であるが、『拾遺』の復原に従えば開元七年令の段階でこの規定は存在したことになる。さらに坂上氏の開元三年令説に従うならば、開元七年の令文改訂以前よりすでにこの文言は存在したことになる。そう解釋するならば、唐の「没落外蕃」條の給復規定は永徽令の時點ですでに天聖令とはほぼ同内容の條文であった可能性が高くなり、日本の「没落外蕃」條は唐令の(d)「其夷僚(獠)新招尉」部分を削除して纂定したことになり、そしてその削除した部分を

『令集解』「没落外蕃」條「古記」が引用したことになる。なお、(b)、(e)の賜物規定は、永徽令の條文中には存在しなかったかもしれない。なぜなら、この部分は養老令には見えず、もし永徽令にあったとすれば、日本令がことさらに賜物規定だけを削除したとも考えにくいからである。

この點と關連して想起されるのは、『唐令拾遺』戸令第十九條（開元二十五年令）の次の條文である。

諸没落外蕃得還、及化外人歸朝者、所在州鎮給衣食、具狀送省奏聞。化外人、於寬鄉附貫安置。落蕃人、依舊貫、無舊貫任於近親附貫。

諸そ、外蕃に没落して還るを得たる、及び化外人の歸朝する者は、所在の州鎮は衣食を給し、狀を具えて省に送りて奏聞せよ。化外人は、寬郷に於て貫に附して安置せよ。落蕃人は、舊貫に依り、舊貫無ければ近親に任じて貫に附せ。對應する養老戸令第十六條は、次のとおりである。

凡没落外蕃得還、及化外人歸化者、所在國郡給衣糧、具狀發飛驒奏聞。化外人、於寬國附貫安置。没落人、依舊貫、無舊貫任於近親附貫。並給糧、遞送使達前所。

兩條を比較すれば、日本令は唐令の「所在州鎮給衣食」部分を採用しているのであるから、とすれば前掲賦役令の(b)、(e)の賜物規定のみ採用しなかったというのは、やはり考えにくいのではなからうか。斷定はできないが、(b)、(e)部分は唐令では、永徽令以後の經驗則によって挿入された規定であるかもしれない。

ところで、天聖令「戸令」は未發見であるが、右の『拾遺』第十九條に相當する條文が必ずや不行唐令の中に存在するはずである。なぜならば、ここに見える「化外人歸朝者」は「没落外蕃得還」者とセットになっているのであるから、それは賦役令の「外蕃之人投化者」と同一對象であり、この對象者は戸令で附貫が、賦役令で復除が規定されるのであって、戸令・賦役令の兩條がセットになって初めて意味をなすからである。

その附貫・復除の扱いであるが、日本の規定では、『延喜式』卷二五、主計下、大帳式に、不輸の場合の書式を次のよ

うに定めている。

口若干見不輸

口若干放人在役

口若干仕丁

口若干衛士

口若干使蕃

口若干放賤従良

口若干去狹就寛

口若干歸化

ここに見える「歸化」について、田中史生氏は、これを戸令で附貫された「化外人歸化者」が賦役令で給復されている形態の書式とし、この対象者は「歸化」が認められ附貫された段階で百姓として扱われ、当初の一〇年は特別措置として給復されるにすぎないと解釋された。⁽¹⁾この解釋は、『延喜式』の「放賤従良」が前掲トウルファン文書「某郷戸口帳(草)」でも確認されるのであるから、唐でも同様に扱われたと解してよいであろう。

以上のとおりであるとすれば、唐における「化外人歸化者(『外蕃之人投化者』)」は、附貫後一〇年を経過すれば租・調・役負擔を課されるのであり、氏族などの組織や聚落を單位にして唐に内附する者ではなく、個人や家族で内附する形態と見るべきである。それに對して、「夷獠新招尉」者とは、天聖令によつて「外蕃之人投化者」と同一條文中に規定されること明らかになったのであるから、もちろん兩者は令規定の時代差によつて解釋することはできず、しかも給復年數が違うのであるから、法理念上は「外蕃之人投化者」とは全く異なつた對象が想定されていたと見なければならぬ。それならば、この「夷獠」はどう解釋すればよいであろうか。

三 「夷獠」と「夷狄」

(1) 唐の「夷獠」招慰

天聖令「沒落外蕃」條を一見して氣づくのは、これまで『唐令拾遺』賦役令第十七條（前掲『史料B』）は「夷狄」を對象とした規定だとばかり思われてきたものが、實は唐令の原文には「夷獠」と記されていたことである。

「獠」と稱される民族が正史外國傳に初めて立傳されるのは、『周書』卷四九、異域傳上である。その冒頭には、


獠は、蓋し南蠻の別種なり。漢中より邛（四川省邛崃縣）・笮（同成都附近）に達するまでの川洞の間、在所に皆これ有り。

とあり、太祖宇文泰が梁州・益州を平定後に撫慰した結果、

其の華民と雜居する者は、亦た頗る賦役に従う。

という状況になったと記され、さらに、

後に商旅の往來する者有りて、亦た資するに以て貨（隸屬口）と爲し、公卿より民庶の家に逮ぶまで、獠口有る者多し。

と伝えられ、一部の獠はこの頃より北周の官民と接觸をもち始めた。隋唐の史書では、「獠」「生獠」「熟獠」「地名十獠」「夷獠」などと現れる。今試みに『隋書』『舊唐書』に現れる「獠」「夷獠」の登場地域を地圖に置いてみると、圖1のとおりである。圖でわかるように、隋唐時代の獠・夷獠は中國の西南部（現在の四川・貴州・雲南省等）から南方（江西壯族自治區・廣東省等）に分布していた。

『隋書』卷二九、地理志上、梁州の風俗の條に、

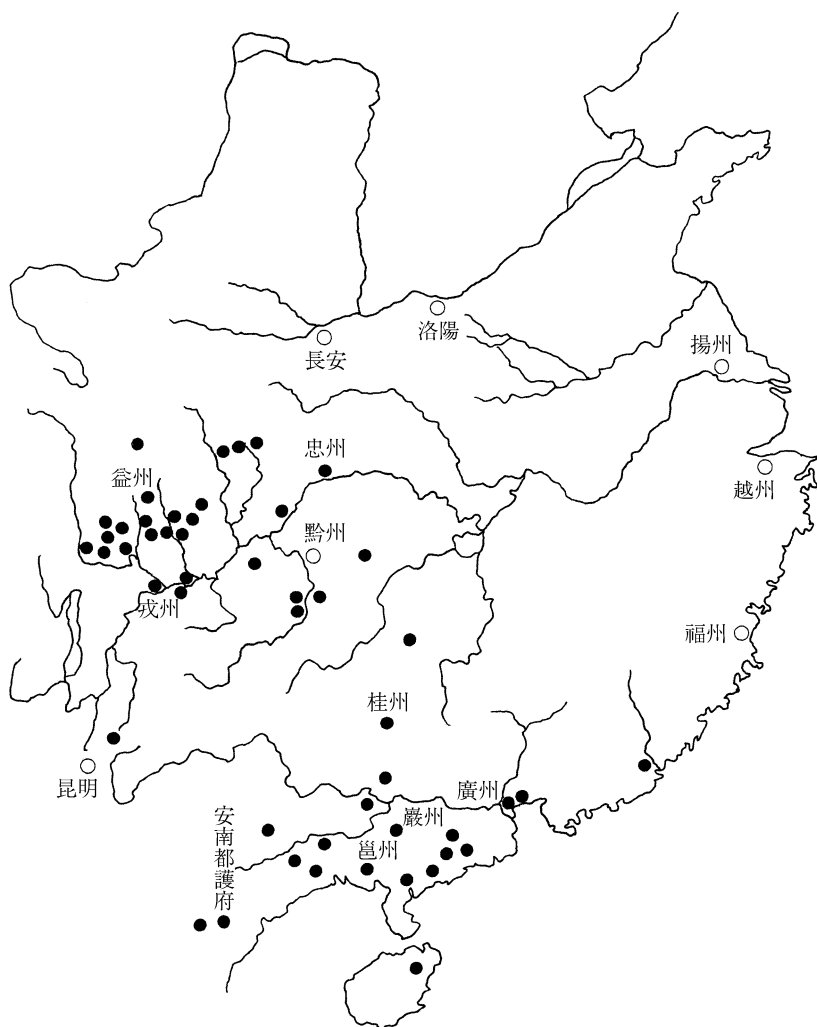


圖1 隋唐時代「獠」「夷獠」分布圖

- 1) 『隋書』『舊唐書』に地名の明記されている事例のみを●で示す。
- 2) 比定困難の地名は『通鑑』胡注に従った。
- 3) 同一地に複数回登場する場合もマークは1つだけとする。
- 4) 譚其驥主編『中國歷史地圖集』第5冊に基づいて作図。

南山（四川省南部縣南）を傍らにして、雜して獠戸有り。富室は頗る夏人に參じて婚を爲し、衣服・居處・言語は、殆ど華と別たす。

とあり、同書卷四五、文四子傳、庶人秀の條には、越王を廢された文帝の第四子楊秀が内侍省に幽閉された時の處遇として、

妻子と相見ゆるを得ず、獠婢二人を給して驅使せしむ。

と見えるので、隋代の獠には漢文化に相當馴染んだ者もいたと思われる。さらに、夷獠に課税した史料も存在し、同書卷三七、梁睿傳には、益州總管であつた梁睿が蜀の地に威を振るつたため夷獠が歸附したが、南寧（貴州西部・雲南）の酋帥のみは降附せず、そこで南寧討伐を上疏した梁睿は、

獠を押すること既に訖れば、即ち南寧を略定せんことを請う。盧・戎（ともに四川省南部）より已來、軍糧は須らく給すべく、此に過ぐれば即ち蠻夷より徵税し、以て兵馬に供さん。……彼の熟蠻の租調を計るに、城防倉儲に供するに足らん。

と述べ、後にこの策は實行されたという。ここには獠を指して「蠻夷」「熟蠻」とも稱しており、『舊唐書』卷三八、地理志一、劍南節度使の項には、

西は吐蕃に抗し、南は蠻獠を撫す。

とあり、同じく嶺南五府經略使の項には、

夷獠を綏靜し、經略・清海二軍を統ぶ。（……本鎮に輕税し以て自給す。）

とあり、「夷獠」の輕税が記される。また、『隋書』四夷傳には獠または夷獠は立傳されないが、その南蠻傳の冒頭に、

南蠻雜類は、華人と錯居す。曰く蜒、曰く獠、曰く俚、曰く獠、曰く佉と。俱に君長無く、山洞に隨りて居す。古先のいわゆる百越、是なり。

と記される。嶺南地方を取り上げた史料には、ここに見える「俚」と熟して「俚獠」という呼稱も現れる。これらから判断すると、「獠」がある限定された種族を指すのに對し、「夷獠」はそれより範圍が廣く、「蠻夷」「蠻獠」や地域によつては「俚獠」などと同義で、**圖1**のごとくに分布する民族を總稱した用語かと思われる。⁽¹²⁾

しかし、そうはいっても、「化外人」とほぼ同義の「夷狄」とは明らかに異なつた用語であり、それは半ば固有名詞的な民族名であつて、唐代史料が「夷獠」と稱する場合はある特定の民族に限定される。唐・賦役令の「復三年」の對象者は、「夷狄」ではなく、この民族が想定されていたのである。

今にして思えば、「夷狄」は法令用語としてはあまりに適さない。しかし當時は、『令集解』『古記』所引「開元令」によつて復原された**〔史料B〕**しか存在しなかつたので、學界ではこれによつて議論していたのである。そこで舊稿で筆者は、**〔史料B〕**の「招慰」という用語に注目し、まずS一三四四文書「開元戸部格殘卷」に見える次の敕を參考にした。⁽¹³⁾

敕、化外人及賊須招慰者、並委當州及所管都督府、審

勘當奏聞。不得輒卽招慰、及擅發文牒。所在官司、亦不

得輒相承受。如因此浪用官物者、並依監主自盜法。若別

敕令招慰、得降附者、挾名奏聽處分。

長安元年十二月廿日

敕す、化外人及び賊の須らく招慰すべき者は、並びに當州及び所管の都督府に委ね、審らかに勘當して奏聞せよ。輒ち卽ち招慰す、及び擅に文牒を發するを得ず。所在の官司は、亦た輒ち相承受するを得ず。如し此れに因りて官物を浪用すれば、並びに監主自盜法に依れ。若し別敕ありて招慰せしめ、降附を得れば、名を挾^あせて處分を奏聽せよ。

長安元年（七〇一）十二月廿日

これによれば、「招慰」という行爲は、政府の政策として、化外人および賊を對象として行うものである。そして、『舊

唐書』地理志より異民族招慰の事例を検索した結果、江南西道に四例、隴右道に一例、劍南道に五例、嶺南道に二例の合計十二例を見出し、それらはいずれも生獠・黨項・羌・生蠻などを対象に州縣を設置した事例であった。

今、あらためて地理志以外の本紀・列傳などに「招慰」の事例を調べてみると、それらはしばしば隋末唐初の反亂期に現れる。一例を掲げてみよう。河間王李孝恭は高祖の從兄の子であるが、『舊唐書』卷六〇、宗室傳には、

高祖の京師を克するや、左光祿大夫を拜し、尋いで山南道招慰大使と爲る。金州（陝西省安康）より巴蜀に出で、招撫するに禮を以てし、降附する者三十餘州。

とあり、彼は山南道招慰大使として巴蜀を招撫したという。その後、孝恭は荊州總管として長江下流域の群雄林士弘（勢力範圍は現在の江西省一帯）に對處し、同書卷五六、林士弘傳には、

荊州總管・趙王孝恭、使いを遣わして之を招慰し、其の循・潮二州（ともに廣東省東部）並びに來降す。

とあつて、嶺南地方との關係を取り附けている。關中方面を見れば、同書卷五八、殷嶠傳に、

時に、關中の群盜、往往にして聚結し、衆くは適從する無し。嶠をして之を招慰せしむれば、至る所皆下る。とあり、群盜を招慰した事例を見ることが出来る。

夷獠に對する招慰の事例も見出し得る。たとえば、『舊唐書』卷七六、太宗諸子傳の李琨（太宗の孫）の條に、聖曆中（六九八―七〇〇）、嶺南の獠反し、琨に敕して招慰使と爲す。荒徼を安輯し、甚だ其の宜しきを得。

とあり、同傳の李胤（太宗の曾孫）の條に、胤の叔父備のこととして、

後に備、忠州（四川省忠縣）の叛せし獠を招慰せんとし、賊に沒す。

とある。また、同書卷九四、李嶠傳には、

時に、嶺南の邕（廣西壯族自治區南寧）・嚴二州（同來賓）の首領反叛す。……嶠乃ち朝旨を宣べ、特に其の罪を赦し、親ら獠の洞に入りて以て之を招諭すれば、叛せし者盡く降る。

と記されている。

これから知り得ることは、「招慰」とは、それまで自主朝の支配領域外にあった、または反乱などによって支配から離脱した地域・聚落・民族を、自主朝の州縣制に組み入れる行為を指すということである。そしてそれは、責任者に皇族が充てられるケースからもわかるように、地方官などが個人的な判断に基づいて勝手に行うものではなく、政府の政策による行為である。このうち、賊を招慰した事例として、元和九年（八一四）に淮水中流域で起きた反乱を鎮壓するために發せられた「招諭蔡州詔」（『唐大詔令集』卷一一八所收）の一節に、

宜しく授けて申・光・蔡等州招諭使を兼ねしめ……、百姓には復三年を給せ。

とあり、この場合の「招諭」は前掲李嶠傳にもあったように「招慰」と同義と見てよいであろうから、實際に賊を招慰して復三年を給する政策は實行されていたことを傳えているのである。とすれば、賦役令の「招慰」も同様の政策を意味し、夷獠を招慰して州縣に組み込んだ際に當初の三年間は課税を免除すると見てよいであろう。⁽¹⁴⁾

また、前掲S一三四文書「開元戸部格殘卷」の長安元年敕に化外人の招慰方法が規定され、前節で引用したトゥルフアン文書の永徽年間「某郷戸口帳」に「放賤從良」の給復の例が見えることから、唐・賦役令「沒落外蕃」條は、開元七年の令改訂以前より天聖令のような四種の形態を對象とする條文であった可能性が高いといえるであろう。

天聖令「沒落外蕃」條の「夷獠」はわずか二字ではあるが、以上のことを示唆してくれる。したがって天聖令に「夷獠」の二字を見たとき、筆者には個人的に納得のいくものがあり、同時に舊稿における結論は今でも基本的にはその解釋でよいのではないかと思ったものである。ただし、それは結果論としてそうだっただけであり、〔史料B〕の原文が「夷狄」ではなく「夷獠」であったことによって、實は新たな問題が発生するのである。

(2) 日本の「夷狄」解釋について

そもそも、『令集解』所引「古記」の撰者の見た唐・賦役令「没落外蕃」條が天聖令のごとき内容の條文であったとすると、なぜ「古記」は「夷獠」ではなく「夷狄」と記したのであるうか。

この点については、寫本繼承中に誤寫が生じた可能性が否定できないので、まず『集解』の古寫本を確認しなくてはならないであろう。『集解』古寫本の多くは金澤文庫本の系譜を引き、それらは次の諸本である。⁽¹⁵⁾

- ① 紅葉山文庫本（内閣文庫藏、卷子本） 慶長十九年をさほど過らない時期の書寫
- ② 清家本（船橋本、國立國會圖書館藏） 慶長二・四年の間の書寫
- ③ 田中本（國立歴史民俗博物館藏） 諸本のうち最も金澤文庫本の形態に近いとされる
- ④ 鷹司本（宮内廳書陵部藏） 建治二年與書本の轉寫本
- ⑤ 東山御文庫本 建治二年與書本の轉寫本

⑥ 榊原本（國立國會圖書館藏） 清家本系。中原（平田）職忠書寫校合本（平田本）の忠實な轉寫本、寛永十一年書寫右のうち、①は賦役令は缺卷であるが、他本はいずれも「古記」の問題箇所は「夷獠」ではなく「夷狄」に作っており、また右の諸本の系譜を引く東京の諸機關や京都大學所藏の近世の寫本を見ても、やはり同様である。ただし、「古記」原本は「夷獠」と引用したが、惟宗直本が『令集解』編纂の際に誤記した可能性が全くない譯ではない。しかし、その可能性も低いのではないだろうか。なぜならば、「天聖令」宋・賦役令第五條に、

諸邊遠州有夷獠〔雜〕類之所、應有輸役者、隨事斟量、不必同之華夏。

諸そ、邊遠の州の夷獠雜類有るの所、應に輸役有るべき者は、事に隨いて斟量し、必ずしも之を華夏と同じくせず。とあり、『唐令拾遺』賦役令第十二條（開元二十五年令）にも、

諸邊遠諸州有夷獠雜類之所、應輸課役者、隨事斟量、不必同之華夏。

とほぼ同文があるので（復原依據史料『通典』食貨六、賦稅下は、「邊遠諸州」を「邊遠州」に作る）、宋令は唐令を忠實に繼承したことがわかるが、これと對應する養老・賦役令「邊遠國」條には、

諸邊遠國有夷人雜類之所、應輸調役者、隨事斟量、不必同華夏。

とあって、「夷獠」を「夷人」に作っている（ちなみに前掲『集解』諸寫本も同様）。

これらから判斷すると、「古記」の「夷狄」は書寫の際の誤寫ではなく、日本が唐令を受け入れる際に、唐ではいわば半固有名詞的な「夷獠」という用語に馴染めず、これを「夷狄」「夷人」に書き改めたと考える方が穩當であろうと思われる。

ところで、古代日本の律令國家體制を「東夷の小中華帝國」と位置づけた石母田正氏は、その領域的秩序構造を次のように體系づけた。⁽¹⁶⁾

化内

隣國（唐）

化外

蕃國（高句麗・新羅・百濟・渤海等、列島外の國で朝聘使を派遣する主體）
夷狄（蝦夷・隼人等、列島内にいる國家を形成しない状態で隸屬する集團）

その後、石上英一氏は、『令集解』職員令「玄蕃寮」條に規定される「在京夷狄」に對して、「古記」は、

古記云、在京夷狄、謂墮羅・舍衛・蝦夷等。又說、除朝聘外、在京唐國人等、皆入夷狄之例。

古記に云う、在京夷狄とは、墮羅・舍衛・蝦夷などを謂う。又説く、朝聘を除くの外、京に在るの唐國人など、みな夷狄の例に入る。

と解釋しており、「夷狄」には唐人やタイ系・インド系の移住者も含まれ、石母田説では不十分であるので、「夷狄」をさ

らに次のように分類された。⁽¹⁷⁾

列島内に居住する集團……蝦夷・隼人・南島人・國栖

列島外から移住してきた集團……中國系・朝鮮系・北東アジア系・その他

また、律令條文の化内・化外・外蕃・夷狄などの用例を分析した今泉隆雄氏は、夷狄は化外人（＝外蕃人）に含まれず、招慰もしくは征討の結果として京や地方官衙に朝貢（國家間の朝聘ではない）し、原初的な「ミツキ」「エダチ」を進貢する主體として位置づけられ、したがって夷狄は令制の課役を負担せず、法的には歸化の主體となり得ないとされた。⁽¹⁸⁾ それに對して、田中史生氏は、蝦夷（夷狄）は法的には歸化が想定されてはいないが、しかしだからといって蝦夷を化外人ではないと否定することもできず、九世紀になると王朝側は蝦夷が歸化することを認識しているとして、夷狄と化外人の關係を一部修正された。⁽¹⁹⁾ 伊藤循氏は、夷狄は蝦夷と南島人を指し、日本の律令國家が東・西・南・北の化外を形成するために出されたもので、蝦夷の「俘囚」とは化外人が化内人化した形態であり、隼人の場合は化内の地に居住していても夷狄の範疇には入らないと位置づけられた。⁽²⁰⁾ 同じく蝦夷を分析された武廣亮平氏は、蝦夷は律令の身分では夷狄・化外人に設定され、百姓化を目的とした「撫慰」の對象であったが、それに對する蝦夷社會の抵抗が「俘囚」身分を創設させ、やがてそれが「異類」認識へとつながると見て、律令國家の蝦夷認識に段階差が存在することを論じられた。⁽²¹⁾ 熊田亮介氏は、夷狄の中核となるのは蝦夷ではあるが、しかし蝦夷は法制上は歸化・外寇の主體ではなく、したがって附貫の對象でもなく、一貫して「教化」の對象という形態を示すのであり、その意味で日本の夷狄の内實は不透明で實體をとまわず、蝦夷＝夷狄＝化外人という理解や、歸服蝦夷＝化内人、未服蝦夷＝化外人という見方は再検討の必要があるとされた。⁽²²⁾ 大町健氏は、これらの論點を整理された上で、日本古代において外蕃と夷狄が區別されていたことは事實であり、その分離の契機は、中國から見れば東夷である日本古代國家が自己の中華思想によって蝦夷を東夷とする必要があったことによると推定された。⁽²³⁾

一方、日本における夷狄という自他認識の形成について、河内春人氏は、もともとは東西二方面の居住集團に對する單發的な觀念が、七世紀中葉から後半にかけて四夷意識へと變貌をとげ、律令制導入によって四方周邊に對する差別化と「夷狄」設定が完成するとされた。⁽²⁴⁾ また、田中聰氏は、六・七世紀に倭國と多様な關係を持った異種集團の具體的事例を取り上げ「夷人」的關係と稱す、それらは律令國家が新たに空間的な華夷觀念を導入したことによって「夷狄」「外蕃」「公民」の枠組みに整理されたとして、「夷狄」とはそれ以前の「夷人」的關係が再編された觀念ととらえられた。⁽²⁵⁾ 以上のように見てくると、古代日本における「民族」とその統治理念の問題を考察するにあたっては、石母田氏提唱の構造のうち、特に「夷狄」のとらえ方が一つの核となってきたことがわかるであろう。

ところが、實は唐令には「夷狄」なる概念は存在しなかった。そこにあるのは、あくまでも實體をともなった「夷獠」であり、彼らの聚落であつた。したがって、唐令の理念では「外蕃人」と「夷狄」とはともに百姓化することを前提とした形態であるにとらえたり、唐令では「夷狄」も課役負擔が前提であるとして、それによって日本の「夷狄」の形態を考へる方法は、妥當な手續きとはいえない。唐令の理念には、「夷狄」という身分や形態は存在しないからである。また、今泉氏は、唐令「夷狄新招慰、附戸貫者、復三年」(前掲【史料B】「拾遺」賦役令第十七條)は、夷狄が招慰によつて歸服・移住したが邊遠州がまだ設置されていない段階の規定であり、それに對して唐令「諸邊遠諸州有夷獠雜類之所」條(前掲【拾遺】賦役令第十二條)は、邊遠州に移住して復三年が終わる段階の規定と解釋された。⁽²⁶⁾ しかし、これは熊田氏が指摘されたように、⁽²⁷⁾ 必ずしも二段階として解釋する必要はなく、夷獠の聚落が唐の州縣制に組み込まれても、そのような邊遠州の課役は内地百姓の租調役と同様にするのではなく、しかも當初の三年間は給復すると解釋すべきであろう。

一方、日本令の解釋においても、日本令は「諸蕃」とは異なる概念として「夷狄」を導入し、兩者を區別したうえで「夷狄給復三年」を削除したのであるから、給復は「諸蕃」の歸化人への一〇年制に一本化したことになり、したがって「夷狄」の歸化は概念上あり得ないというような考え方にも、⁽²⁸⁾ 疑問の餘地が残されよう。なぜなら、日本令は「夷狄」を

導入したというよりは、唐令の「夷獠」が自國の状況にはそぐわないために、それを「夷人」「夷狄」という言葉に置き換えたにすぎないという解釋が可能だからである。そもそも、養老令條文の本文に「夷狄」なる語が使用されるのは、職員令「玄蕃寮」條の「在京夷狄」一例のみである。もし、日本賦役令「邊遠國」條の「夷人」や「沒落外蕃」條所引「古記」の「夷狄」が、唐令「夷獠」の語を避けただけとしたら、「在京夷狄」が本當に「夷狄身分」「夷狄形態」を規定したもので言い切れるであろうか。これは、ただ單に「京師にいる外國人」の意という可能性はないのだろうか。あるいは、夷獠を夷狄と改めるにあたっては、「狄」にこそ意圖を込めたとも考え得るであろう。ただし、そう考えた場合、「邊遠國」條の「夷人」はどう考えればよいであろうか。

日本古代の王朝が、列島外の地を「化外」と稱し、そこに居住する人々を「化外人」「外蕃人」と認識していたことは確かであろうし、また列島内に王朝の教化に従わず、あるいは従っても百姓とは異なつた生活文化を保持する人々が存在したことも、事實であろう。ただし、唐令を當然熟知していた大寶令・養老令の編纂者や明法家たちが、唐令には存在しない「夷狄」という概念・範疇を創作し、それによってそのような列島内の人々を把握しようとしたのかどうかという點は、自ずと別問題である。詳細は日本古代史の専門家と議論しなければならないが、天聖令の出現によって、少なくとも「夷狄」なる身分・形態については基礎的な部分からあらためて問い直す必要性が生じたことだけは、確かであろう。

四 天聖令における輸羊・銀錢規定その他の條文の扱い

(1) 輸羊・銀錢規定條文の削除

さて、舊稿において分析した唐・賦役令三條のうちの残る一條、すなわち前掲〔史料C〕「諸國蕃胡内附者」に對する輸羊・銀錢規定（『拾遺』賦役令第六條）は、天聖令ではどのように扱われていたであろうか。實は、この條文は天聖令の

宋令・不行唐令いずれにも全く見出し得ないのである。これも、今にして思えば、『通典』食貨典六、賦税下の開元二十五年令に基づくとされる課役規定記事群のなかに輸羊・銀錢規定は記されていないのであるから、開元二十五年令に同條は存在しなかったというヒントは、すでに與えられていたといえる。しかし、杜佑が編纂にあたってこのいわば特殊な税制を省略した可能性も完全には否定できないのであるから、斷定は困難だったのである。それが、天聖令の出現によって、同條が開元二十五年令（もしくはそれを繼承した唐後半期の令）に存在しなかったことは動かせなくなった。

ただし、輸羊・銀錢規定がそれ以前の唐令にも全く存在しなかった譯ではない。『舊唐書』卷四八、食貨志上に、

武德七年、始定律令。……賦役之法、……蕃胡內附者、上戸丁稅錢十文、次戸五文、下戸免之。附經二年者、上戸丁輸羊二口、次戸一口、下三戸共一口。

とあり、「賦役之法」以下の中略部分には、租調規定、歲役規定、嶺南稅米規定が、引用部分の次には災害課役免除規定が記される（『冊府元龜』卷四八七、邦計部賦稅一も同じ。『通典』卷六、食貨典賦稅下は中略部分に調・歲役記事がないがその他は同じ）。この書き方から見て、右の條文は武德七年賦役令には存在したと考えざるを得ない。また、『大唐六典』卷三、戸部郎中員外郎「賦役之制」の條にも、前掲〔史料C〕の記述があり、『六典』は開元七年令に基づいて編纂されたとするのが學界のほぼ通念であるから、それに従えば開元七年令にも輸羊・銀錢規定は存在したはずなのである。ただし、〔史料C〕の九等戸規定の部分に關しては、唐の九等戸制は貞觀九年に始まるとされるので、武德七年令の條文には存在せず、それ以後の規定が適用されたものと考えられる。以上のように考えてよいとすれば、天聖令では不行唐令の條文群にもこの規定が見えないのであるから、輸羊・銀錢規定の條文は開元二十五年令編纂の段階で削除されたと解釋するのが最も穩當であろう。

ところで、右に觸れた『舊唐書』食貨志の嶺南稅米規定は、『六典』戸部「賦役之制」にも同じ規定が記されており、そこには〔史料C〕に續いて、

凡嶺南諸州稅米者、上戸一石二斗、次戸八斗、下戸六斗。若夷獠之戸、皆從半輸。

凡そ、嶺南の諸州の稅米は、上戸は一石二斗、次戸は八斗、下戸は六斗とせよ。夷獠の戸の若きは、皆、半輸に従え。とある。ここに見える「夷獠之戸」は、もちろん前節で見た嶺南道に居住する夷獠が招慰などの結果として唐の戸口に把握された形態であり、嶺南道の住民にはその一般的生業から稅米が課されるが、夷獠戸の納稅額は百姓の半額とすることを規定している。嶺南道の稅制は特殊なのでこのような規定が設けられたのであり、ここに見える夷獠の稅米半輸も、基本的には前掲賦役令「邊遠諸州有夷獠雜類之所……不必同之華夏」の對象に含まれ、租調役より負擔の軽い「輕稅州」の範疇に入ると見てよいであろう。⁽³⁰⁾

さて、右の規定は、『舊唐書』食貨志と『六典』戸部の「賦役之制」にともに記されるのであるから、輸羊・銀錢規定と同様に武德七年令と開元七年令の賦役令にこの條文は存在したと見てよい。ところが、天聖令にはやはりこの條文は見えないのである。同様のことが、次の規定にもいえる。『六典』には、右の嶺南稅米規定に續いて、

輕稅諸州、高麗・百濟應差征鎮者、並令免課役。

輕稅諸州の、高麗・百濟の應に征鎮に差すべき者は、並びに課役を免ぜしめよ。

とある。中國邊境の輕稅州に移住し、または中國領に組み込まれて唐の戸口として把握された高句麗人・百濟人を軍鎮に徴兵した場合の課役免除規定である。『舊唐書』食貨志の「賦役之制」には見えない規定なので、武德七年令にこの條文が存在したとはいえないが、『六典』戸部には記されるので、開元七年令には存在したと見られる。ただし、『唐令拾遺』はこの記事を上掲嶺南稅米規定とあわせて賦役令第七條（武德七年令、開元七年令）として復原したが、開元七年令でこの兩種の規定が同一條文中に記されていたのか、別條だったのかまでは斷定できない。そして、いずれにしても、この條文も天聖令には存在しないのである。そればかりか、『通典』食貨典六、賦稅下の開元二十五年令に基づくとされる課役規定群のなかにも、右の嶺南諸州稅米規定と高麗・百濟應差征鎮規定は全く見られない。

とすれば、われわれは次のように考えてよいのではないだろうか。すなわち、唐では國初の武徳七年令で定めた規定に基づいて諸族を統治し始め、その後それに様々の運用方法が加わり、それらの事情を踏まえて開元七年令を制定したが、あらためて開元二十五年令を制定する段階に至ってそうしたいわば特殊な税制規定はすべて削除された、と。

その削除の手續きであるが、『六典』には〔史料C〕輸羊・銀錢規定に續いて、

凡内附後所生子、即同百姓、不得爲蕃戶也。

凡そ、内附の後に生まるる所の子は、即ち百姓と同じにして、蕃戸と爲るを得ざるなり。

とある。ここに見える「蕃戸」が、輸羊・銀錢規定の對象者と同値であるのか、あるいは邊遠諸州の夷獠雜類や輕稅州も範疇に含むのかの斷定は困難であるが、〔史料C〕に續けて記されるので、少なくとも輸羊・銀錢規定の對象者は蕃戸に含まれると見てよいであろう。とすれば、開元七年令では、内附の後に唐で生まれた二世には、輸羊や銀錢ではなく、租調役が課されるように改められたことになる。一方、前述のとおり、「邊遠州」條は天聖令・宋令と日本令のどちらにも存在するのであるから、この條文は唐令には一貫して置かれていたと考えられる。以上から判斷すると、唐は内地の羈縻州民や輕稅州民、または商業に携わる非百姓の外國人などに對する課役を、二世から百姓化する形で租調役負擔の範疇に取り組み、邊遠州の課役はその地域的事情を考慮して存續させ、この二本立ての形で税制を單純化したと理解してよいのではあるまいか。すなわち、それまで非百姓的課役を負擔していた内附民族は、開元二十五年令以後は百姓・邊遠州民のいずれかに振り分けられたと思われる。そしてこのことは、建國後百年以上の年月を経験した唐が、その多民族統治王朝としてようやく社會が成熟してきたことの一つの現れといえるのではないだろうか。

(2) 「蕃域」「絶域」規定について

前節で、古代日本の民族統治における「夷狄」概念に對して、若干の疑義を呈した。それは換言すれば、日本の古代王

朝の國家構造理念が、「夏華」「夷狄」「外蕃」といういわば三重構造的な理念に基づくものであったかどうか、という点への疑問でもあった。實は、やや類似した問題が、天聖令の出現によって唐代史研究の分野でも浮かび上がってくる。すなわち、「蕃域」「絶域」の問題であり、唐代中國の天下觀や化内・化外構造理念に關わることであるので、最後にこの問題を取り上げたい。

『唐令拾遺』雜令第十四條は、次のように復原されていた。

諸官人緣使、諸色行人請賜訖、停行並却徵。已發五百里外徵半、一千里外停徵。已造衣裳聽兼納。東至高麗、南至眞臘、西至波斯・吐蕃及堅昆都督、北至突厥・契丹・靺鞨、並爲入蕃、餘爲絶域。(開元二十五年令、依據史料『白氏六帖事類集』卷一六、和戎)

諸そ、官人の使に緣り、諸色の行人請いて賜い訖りて、行を停めれば並びに却け徵せ。已に發して五百里外ならば半ばを徵し、一千里外ならば徵を停めよ。已に衣裳を造りしは、兼ね納むるを聽せ。東は高麗に至り、南は眞臘に至り、西は波斯・吐蕃及び堅昆都督に至り、北は突厥・契丹・靺鞨に至るを、並びに蕃に入ると爲し、餘は絶域と爲せ。

ここに、四至の記述が見え、これらの國・民族に至るまでの範圍を「入蕃」、その外を「絶域」と記している。この「入蕃」を、「絶域」と對比させて便宜上「蕃域」と稱し、唐は化外の地を「蕃域」「絶域」の二重構造理念によつてとらえていたとする理解がしばしば行われてきた。⁽³¹⁾ところが、天聖令の宋・雜令第二十條は、次のような條文であつた。

諸官人緣使、及諸色行人請賜訖、停行者、並却納。已發五百里外者納半、一千里外者勿納。應納者、若已造衣物、仍聽兼納。其官人有犯罪追還者、但未達前所、賜物並復納。

諸そ、官人の使に緣る、及び諸色の行人請いて賜い訖りて、行を停めれば、並びに却け納れよ。已に發して五百里外ならば半ばを納れ、一千里外ならば納を停めよ。應に納るべき者、若し已に衣裳を造りしは、兼ね納むるを聽せ。其れ、官人の罪を犯して追還すること有る者は、但だ未だ前所に達せざれば、賜物は並びに復た納れよ。

『拾遺』の條文と違って「徵」と「納」が使い分けられていないので、意味が取りにくいですが、今はそれはともかく、ここには四至記事も「入蕃」「絶域」の文言も見えない。これらの文言は、不行唐令を含めた他の條文にも一切見当たらないのである。

一方、對應する養老雜令は、次のとおりである。

凡官人等因使得賜、使事停者、所賜之物、並不在追限。其有犯罪追還者、所賜物並徵納。

凡そ、官人ら、使に因りて賜を得、使の事停まば、賜う所の物は、並びに追する限りに在らず。其の罪を犯して追還すること有る者は、賜う所の物は並びに徵納せよ。

これを見れば、内容的には『拾遺』復原條文よりも天聖令の條文にはるかに近いことがわかるであろう。すなわち日唐雜令のこの條文は、官人が使者として派遣される際の賜物に關して規定したもので、おそらく唐令では武德七年令からほぼ同内容の條文が繼承されたと考えられる。そして、その規定は、本來は外國へ派遣される使人に限定されるものではないにもかかわらず、あたかもそう思ってしまうのは、『拾遺』の復原依據史料『白氏六帖』に四至と「入蕃」「絶域」規定が記されているからにすぎなかったのである。

そもそも、「入蕃」「絶域」規定の源は、『唐會要』卷一〇〇、雜錄に、

聖曆三年（七〇〇）三月六日敕、「東至高麗國、南至眞臘國、西至波斯・吐蕃及堅昆都督府、北至契丹・突厥・靺鞨、並爲入蕃、以外爲絶域。其使應給料、各依式」。

とある敕である。すなわち、『白氏六帖』の記事は、前半部分（「已造衣裳聽兼納」まで）は開元二十五年令を引用し、後半部分は聖曆三年三月六日敕を引用して、繋ぎ合わせた文章だったのである。

『唐會要』雜錄に採録された聖曆三年三月六日敕の前後には、次のような敕が載せられている。

證聖元年（六九五）九月五日敕、「蕃國使入朝、其糧料各分等第給。南天竺・北天竺・波斯・大食等國使、宜給六箇月

糧、尸利佛誓・眞臘・訶陵等國使、給五箇月糧、林邑國使、給三箇月糧」。

證聖元年（六九五）九月五日敕す、「蕃國使の入朝するに、其の糧料はおのおの等第を分かちて給せ。南天竺・北天竺・波斯・大食等の國の使いは、宜しく六箇月の糧を給すべく、尸利佛誓・眞臘・訶陵等の國の使いは、五箇月の糧を給し、林邑國の使いは、三箇月の糧を給せ」と。

開元四年（七一六）正月九日敕、「靺鞨・新羅・吐蕃、先無里數。每遣使給賜、宜準七千里以上給附也」。

開元四年（七一六）正月九日敕す、「靺鞨・新羅・吐蕃は、先に里數無し。使いを遣わし賜を給することに、宜しく七千里以上に準じて給附すべきなり」と。

これらの敕は、外國から唐に派遣されてきた使節が歸國の途に着くにあたつて、唐側が保證する旅費・食糧の支給額に關して定めた條令である。一方、聖曆三年三月六日敕は、逆に唐の使者が外國に行く場合の旅費・食糧を規定したものであるが、いずれの場合も極めて實務的な内容をとまなう條令であることがわかるであろう。これら三つの詔敕は、七世紀末～八世紀初期の時期、すなわち武后朝末期～玄宗朝初期にかけて發せられている。おそらく、太宗・高宗朝に東・西突厥や高句麗との抗爭を終結させ、外交事務に成熟してきた唐は、ちょうどこの頃に、外國使節の歸路や自國派遣使節の往復の糧料支給に關するマニュアル作成が必要となつたのであろう。

聖曆三年敕をあらためて見てみると、この敕は末尾の「應に給すべき料はおのおの式に依れ」の部分に眼目が置かれていることがわかるであろう。この式の規定内容は知るべくもないが、「式に依れ」と記される詔敕が、開元二十五年令の條文には採録されず、それよりも後世の『白氏六帖』に引用されているのであるから、おそらく聖曆三年敕は「格」に採録されて伝えられたと理解してよいのではあるまいか。

以上のように見てくると、われわれは、『白氏六帖』の記述に基づいて、唐の天下理念では化外の地を「蕃域」「絶域」に分けてとらえていたという、化外「二重構造」的解釋をとるべきではなかつたのである。

表1 内附民族対象規定繼承表

規定内容	武徳7年令	開元7年令	開元25年令	天聖令
化外人歸朝者附貫	○	○	○	×
外蕃投化者復10年	○	○	○	×
夷獠招慰者復3年	?	○	○	×
銀錢・輸羊規定	○	○	×	×
嶺南稅米・夷獠半輸規定	○	○	×	×
高麗・百濟征鎮者の課役免除	×	○	×	×
内附後生子の百姓化規定	?	○	×	×
邊遠州夷獠雜類稅	○	○	○	○
入蕃・絶域の程糧	×	×	×	×

むすび

以上、述べたことを要約すれば、

① 舊稿で取り上げた唐・賦役令規定三條のうち、「外蕃人投化者復十年」規定（『拾遺』賦役令第十六條）と「夷狄招慰者復三年」規定（同第十七條）とは、唐令では同一條文に規定されており、後者の原文は「夷狄」ではなく「夷獠」であった。

② 「夷獠」とは、現在の四川・貴州・雲南・廣東省・江西壯族自治區に分布する種族で、實體をともなったある特定の種族を指す用語であり、賦役令の條文は彼らを新たに唐の戸籍に組み込んだ際の規定である。

③ 日本の法制史料に見える「夷狄」「夷人」は唐の「夷獠」を書き換えた表現であり、したがってそれらに依據して身分形態としての「夷狄」を想定する考え方には、再考の餘地が残される。

④ 「輸羊・銀錢」規定（『拾遺』賦役令第六條）は、「嶺南諸州稅米」規定（同第七條）などの特殊稅とともに、開元二十五年令では削除されたと思われる。

⑤ 「蕃域・絶域」規定は、唐令には一貫して條文化されてはならず、これらは天下理念構造ととらえるべきではなく、あくまでも程糧の

規定であつて、聖暦三年敕が格として『白氏六帖事類集』に受け継がれたものと思われる。
のごとくである。なお、小論で取り上げた諸規定の繼承を表示すれば、表1のようになろう。

註

- (1) 石見清裕「唐の内附異民族対象規定をめぐって」(堀敏一先生古稀記念『中國古代の國家と民衆』、汲古書院、一九九五年、石見『唐の北方問題と國際秩序』、汲古書院、一九九八年、再録)。
- (2) 仁井田陞著、池田溫編集代表『唐令拾遺補——附唐日兩令對照一覽』(東京大學出版會、一九九七年)。
- (3) 戴建國「天一閣藏明鈔本『官品令』考」(『歷史研究』一九九九年一三)、同「天一閣藏『天聖令・賦役令』初探(上)(下)」(『文史』二〇〇〇—四、二〇〇一—)。
- (4) 天一閣博物館・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組「天一閣藏明鈔本天聖令校證——附唐令復原研究——」(中華書局、二〇〇六年)。天聖令の發見経緯や中國・臺灣・日本における研究状況などについては、岡野誠「北宋の天聖令について——その發見・刊行・研究狀況——」(『歴史と地理』六一四「世界史の研究」二二五、二〇〇八年)参照。
- (5) 最近、盧向前・熊偉兩氏は、田令條文の分析から、天聖令・不行唐令は開元二十五年令ではなく唐・建中年間の令である可能性を述べ、それに對して戴建國氏は、唐後半期に詔敕發布によって令文追補は行われたが、基本的に不行唐令は開元二十五年令を下敷きになっている點を再確認している。盧・熊「『天聖令』所附『唐令』爲建中令辯」(『國學研究』二二、二〇〇八年)、戴「『天聖令』所附唐令爲開元二十五年令考」(『唐研究』一四、二〇〇八年)。
- (6) その一端は、大津透編『日唐律令比較研究の新段階』(山川出版社、二〇〇八年)を参照されたい。
- (7) 坂上康俊「令集解」に引用された唐の令について『九州史學』八五、一九八六年、『唐令拾遺補』七七四頁。
- (8) 『唐令拾遺補』七七四頁。
- (9) 『大谷文書集成』壹(法藏館、一九八四年)、圖版九六。ここで示した訓讀案は、本文書を縣が下達した牒式文書と見たものである。したがって第四行に「故に牒す」を補った。トゥルフアンの行政文書書式については、赤木崇敏「唐代前半期の地方文書行政——トゥルフアン文書の検討を通じて——」(『史學雜誌』一一七—一二、二〇〇八年)、特に圖3の(3)(4)、および七八頁参照。
- (10) 『吐魯番出土文書』六(文物出版社、一九八五年)一一五頁、『唐令拾遺補』七七四—七七五頁。
- (11) 田中史生「律令制下における『歸化人』と『復』」(初出一九九五年、同氏『日本古代國家の民族支配と渡來人』、校倉書房、一九九七年、再録)。

(12) 天聖令・醫疾令の不行唐令第十七條に「諸州醫博士、助敎、於所管戸内及停家職資内、取醫術優長者爲之。(軍内者仍令出軍。)」若管内無人、次比近州有處兼取。皆州司試練、知其必堪、然後銓補、補訖申省。其學生取人、依太醫署。若州在邊遠及管夷獠之處、無人堪習業者、不在置限」とあり、「夷獠」が見える。この夷獠も、「州在邊遠」と併稱されていることから、**圖1**に分布する種族を指すと思われる。この條文の「夷獠」については、二〇〇七年度「東洋史研究會大會」において岡野誠氏(明治大學)よりご質問をいただいた。記して謝意を表したい。對應する養老醫疾令第一條は「醫博士、取醫人内法術優長者爲之。按摩・咒禁博士、亦准此」であり、「夷獠」關連規定は採っていない。また、北京圖書館(中國國家圖書館)善本部藏、敦煌寫經周字六九號「戸部格殘卷」、第三五―四三行「開元二〇年敕」に、

敕、如開嶺南首領□□ 史上佐及□
 多因官置莊、抑買百姓田園、招誘□
 稱是子弟、以爲通數。夷獠戸等、不勝□

斷。仍委按察使及經略使、捉□

□□庄園並收入、官給貧弱下□ (以下、引用略)

とあり、嶺南道「置莊禁斷」敕に夷獠戸救濟措置が見える。池田溫「唐朝開元後期土地政策の一考察」(堀敏一先生古稀記念『中國古代の國家と民衆』、汲古書院、一九九五年)、T.Yamamoto, O.Ikeda, Y.Dohi, Y.Kegasawa, M.Okano,

Y.Ishida, T.Seo co-ed., *Tun-huang and Turfan Documents, Concerning Social and Economic History Supplement(A)*, pp.4-5, Toyo Bunko, Tokyo, 2001.

(13) Tatsuro Yamamoto, On Ikeda, Makoto Okano, *Tun-huang and Turfan Documents, Concerning Social and Economic History I, Legal Texts(A)(B)*, Toyo Bunko, Tokyo, 1980.

(14) 『周書』卷六、武帝紀下、建德四年(五七五)六月條には、北周が新たに支配下に入れた舊北齊領の地域に對して復三年を給する詔が載せられているので、新附の戸に對する「給復三年」の理念は北周代から存在したことが知られる。

(15) 水本浩典『「令集解」諸本の系統的研究』(同氏『律令注釋書の系統的研究』、塙書房、一九九一年、所收)參照。諸本のうち、田中本は『國立歷史民俗博物館藏貴重典籍叢書』歴史篇第六卷、參照。また、鷹司本・東山御文庫本の寫眞版入手にあたっては、宮内廳書陵部編修課、高田義人氏のご協力をいただいた。

(16) 石母田正「天皇と『諸蕃』——大寶令制定の意義に關連して——」(初出一九六三年、『石母田正著作集』四、岩波書店、一九八九年、再録)。

(17) 石上英一「古代東アジア地域と日本」(朝尾直弘編『日本の社會史』一、岩波書店、一九八七年)。

(18) 今泉隆雄「律令における化外人・外蕃人と夷狄」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』、吉川弘文館、一九九四年)。

- (19) 田中史生、前掲論文、同「蝦夷と『歸化』」(前掲書所収)。
- (20) 伊藤循「古代王權と異民族」(『歴史學研究』六六五、一九九四年)。
- (21) 武廣亮平「八世紀の『蝦夷』認識とその變遷」(『國立歴史民俗博物館研究報告』八四、二〇〇〇年)。
- (22) 熊田亮介「蝦狄と北の城柵」(小林昌二編『越と古代の北陸』、名著出版、一九九六年)。
- (23) 大町健「東アジアのなかの日本律令國家」(日本史講座二『律令國家の展開』、東京大學出版會、二〇〇四年)。
- (24) 河内春人「日本古代における禮的秩序の成立——華夷秩序の構造と方位認識——」(『明治大學人文科學研究所紀要』四三、一九九七年)。
- (25) 田中聰「夷人論——律令國家形成期の自他認識——」(『日本史研究』四七五、二〇〇二年)。
- (26) 今泉、前掲論文、一六七頁。
- (27) 熊田、前掲論文、一九四頁。
- (28) たとえば、熊田、前掲論文、一九三頁、一九七頁。
- (29) 船越泰次「北朝・隋・唐代の戸等制をめぐって」(『唐代史研究會編『中國律令制の展開とその國家・社會との關係』、刀水書房、一九八四年)。
- (30) 熊田亮介氏は、「夷獠雜類」と把握されるのは、同じ附貫の対象であっても、投化・招慰によって百姓化する四夷とは別個の存在であることを示すのではないかと述べられている(熊田、前掲論文、一九五頁)。外蕃人の投化者の場合はそのとおりであろうが、招慰附貫者は「夷獠雜類」に含まれると思う。なお、輕稅州については、李錦繡「唐前期『輕稅』制度初探」(『中國社會經濟史研究』一九九三—一、同氏『唐代財政史稿』上卷、第二編第一章「六、對少數民族地區的特殊稅制——輕稅」、北京大學出版社、一九九五年、再録)、『唐令拾遺補』七六八頁、參照。
- (31) 仁井田陞『中國法制史研究——法と慣習・法と道德』(東京大學出版會、一九六四年、増補一九八〇年)第一部第一章「東アジア諸國の固有法と繼授法」、金子修一「唐代冊封制一斑——周邊諸民族における『王』號と『國王』號——」(初出一九八四年、同氏『隋唐の國際秩序と東アジア』、名著刊行會、二〇〇一年、再録)、堀敏一「中國と古代東アジア世界」(岩波書店、一九九三年)二四三—二四九頁、石見清裕「唐代の國家と『異民族』」(『歴史學研究』六九〇、一九九六年)等。

A RE-EXAMINATION OF THE REGULATION OF SUBJECT PEOPLE DURING THE TANG DYNASTY, BASED ON THE TIENSHENG-LING CODE OF KAIYUAN 25

IWAMI Kiyohiro

In 1995 I analyzed the Fuyi-ling 賦役令, the Tang dynasty tax codes for alien peoples who had been subjects of the empire. This was in order to understand the character of the Tang dynasty as a multi-ethnic state.

The three articles of the regulations that I examined at that time were 1) the regulation exempting naturalized subjects from paying taxes for ten years; 2) the regulation exempting the Yidi 夷狄 from paying taxes for three years; and 3) the regulation on paying taxes in silver currency or sheep. However, with the publication of the newly discovered Tiansheng-ling 天聖令 in 2006, it became possible to view the original text of the laws promulgated in the 25th year of the Kaiyuan reign. It thus became necessary to revise my analysis.

The first and second regulations are combined in a single article of the Tiansheng-ling, and the word Yilao 夷獠 is used instead of Yidi. The Yilao were people who inhabited areas of southern or southwestern China. The second regulation was created when they were incorporated into the territory of the empire. Therefore, the concept Yidi does not appear in the legal code. As regards ancient Japanese administrative law, which was influenced by the Tang codes, the term Yidi has been thought to refer to people in an intermediate state (neither Japanese nor foreign) and this interpretation must now also be revised.

The third regulation does not appear in the Tiansheng-ling, which was promulgated in Kaiyuan 25. However, since this article indisputably existed in the Tang legal system prior to this point, it is clear that it was eliminated from the code of Kaiyuan 25. As other special regulations concerning taxes were also removed, it can be surmised that the tax code was simplified in the code of Kaiyuan 25.

Moreover, it has been thought that during the Tang, foreign lands were divided into *fan'yu* 蕃域, those territories closest to China, and *jueyu* 絕域, the outer limits of the earth. However, it is clear that these conceptions were not stipulated in the administrative law of the Tang, and thus these principles of classification did not exist in Tang times.

In conclusion, the Tang dynasty's method of ruling alien peoples changed over time and according to the period, and these changes can be understood as the process of the maturing of the Tang state.